

Title	ペスタロッチー関連の遺跡保存の現状に関する調査報告：教育思想成立の舞台として
Sub Title	The present state of preservation of monuments left by Pestalozzi : as stages of forming his educational ideas
Author	森田, 希一 (Morita, Kiichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1993
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.37 (1993. ) ,p.57- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000037-0057">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000037-0057</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ペスタロッチー関連の遺跡保存の現状に関する調査報告

—教育思想成立の舞台として—

## The present state of preservation of monuments left by Pestalozzi

—As stages of forming his educational ideas—

森 田 希 一\*

*Kiichi Morita*

In this paper, I report on the present state of preservation of monuments left by Johann Heinrich Pestalozzi (1746-1827) as follows;

① The main sources for this paper are the results of "Pestalozzi Study Tour" that let me conduct a thorough investigation in September 1992 about the monuments of Pestalozzi left in Switzerland, Germany and Italy. In addition, I'd like to use some materials that our friends and I had collected for last ten years.

② Considering the main characteristics of Pestalozzi that his thought and life-style are closely connected, I make a brief sketch of his educational ideas in each stage of his life as well.

③ However, there is a limit of space. Therefore, I can't give a full description of his each monument as well as that of his idea, but can only make a general survey of the present state (1992). And either I don't mention the secondary monuments, —for example, those of Pestalozzi's disciples and "Pestalozzian movements" in some foreign countries, —that aren't directly related to Pestalozzi himself and his activities. Such monuments will be revealed in future.

### 1

本稿は、スイスの教育家、教育思想家ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) の実践的側面の全容を探るという目的にたって行われてきた実地調査をもとに、彼に関連する遺跡保存の現状 (1992年9月現在) をまとめる。同時に、単に事実関係の記述だけでなく、彼の教育思想・哲学成立の舞台としての意味づけを行う。この作業の前提として、次のようなねらいをまず整理しておきたい。

第1。ペスタロッチーの名前は世界的に有名である。それは、教育学や教育哲学といった専門的に彼の思想研究に直接関わるものだけでなく、広範囲に教育に従事するものにとっても、その名前にある種の畏敬の念とか感奮を引き起こさずにはいられない程である。我が国の教

育学者の福島政雄はペスタロッチー研究を「単なる研究ではなく、熱意をもって讃仰するという心持ち」で行ったと記し、同じく長田新は「(ペスタロッチー教育学は)雲表に聳える霊峯であって、……その霊峯遙かに高く仰ぎ見つつ山麓を彼方此方と彷徨ひ……」とも述べている。また、昔も、今日も、ペスタロッチーの名前は多くの教育家、教師たちの崇拜の対象であり、偉大な目標でもある。

こうしたペスタロッチー崇拜の理由は何であろうか。その主要な理由の一つは、彼の思想と実践の一体性にあったと思う。例えば、村井実氏 (以下敬称略) は、「ペスタロッチーの思想が、彼の生涯と切り離して描き出されることのできないものであると感じた。思想と生活が一体なのである。」(『ペスタロッチーとその時代』) と述べている。つまり、ペスタロッチーという人物は、優れた思想や哲学を持ちながらも、それを単に文字や記号

\* 東京国際大学非常勤講師 (教育思想史)

の世界に閉じ込めておかなかつた。自ら考えつつ、同時に、実践した。しかも、さまざまな逆境にあいながらも、生涯にわたって、実践を続けた人物であった。そして、思想にせよ、実践にせよ、それが共に高い段階（おそらく当人はそうは思わなかったが、後世の者はこう評価する）まで、その成果を残せた、歴史上希有の人物である。それが崇拜されてきた大きな理由であろう。

そこで、思想と実践の一体性というペスタロッチー固有のこの特徴を鑑みるに、彼の真の理解には、大きく分けて、二つの側面からのアプローチが想定される。一つは、残された彼の著作や書簡などを綿密に整理、分析するという思想・文献研究。もう一つは、その教育に捧げた生涯と生活の記録、つまり実践の記録を辿ることである。この後者の研究に関しては、残された彼自身の記録、記述や、第三者の証言の記録などに加えて、実際に彼の生きた土地に赴き、その遺跡などを調査するというフィールド・ワーク的な作業も当然含まれてくる。この文脈に立ったとき、実地調査は非常に有効な手段となりうる。

しかし、そうした調査は単にペスタロッチーの遺跡という、ある土地の一点だけに目を向けているというだけで済まされてよいだろうか。ある土地に行き、一つの建物、一つの教会だけを取り上げて、ペスタロッチーはここでこれこれの哲学や実践をなしたと結論するには、あまりにも短絡的、近視眼的ではないか。そうではなく、ペスタロッチーの活動した場は、それらを取り囲むさまざまな条件との密接な関連の上に成立していることを忘れてはならない。そこに本稿の第2のねらいが生まれる。つまり、ペスタロッチーを生み出した、スイスという国の地理的、風土的条件である。

これは非常に重要な要因である。現在でこそ、スイスは世界有数の文明国である。精密機械工業や金融、保険、牧畜などを売りものに、さらに世界有数の観光国として、訪問する者の目を存分に楽しませてくれている。道路網、鉄道網が発達し、3000 m の山の頂上には見事なレストランがある。ちなみに、手元にある統計の本では、現在(1990年)、一人当たりの国民総生産額は全世界で第1位である。だが、本来スイスは山国である。しかも、ペスタロッチーの時代は文字どおり、岩と氷と雪に閉ざされた貧しい山国であった。農民の多くは領主に隷属しながら、山間の寒村に身を寄せ、木綿糸や絹糸を織物や刺繍に細工し、それをウィーンなどの宮廷に売って細々と生計を立てていた。またナポレオン戦争の影響も強く、政治的には、本来連邦制であったにもかかわら

ず、中央集権を強制され、国家としてはまだ不安定で貧困な状態にあったと言わざるをえない。

つまり、岩と氷と雪しかなかったスイスこそが、ペスタロッチーの生涯の舞台であったのである。無論、現在と当時では多くの点で異なっている。しかし、私たちが実際にスイスを調査することによって、この岩と雪と氷しかなかったスイスの風土的、地理的条件を少しでも知り、何かを感じ、そこから当時の状況を憶測することと。ペスタロッチーの思想形成の舞台をそうした視点から再考することには、ペスタロッチー理解の上で、少なからず意味のあることではなからうか。

かかる大きな二つのねらいの下に本稿では、以下の要領で、遺跡保存の現状をまとめる。

① 1992年の9月に行われた Pestalozzi Study Tour (団長: 本吉修二白根開善学校校長, 以下 P.S.T) でのペスタロッチー関連の遺跡調査の結果、並びに最近10年にわたる筆者自身のものや、村井実氏、渡辺弘氏をはじめとする P.S.T. 調査参加者の報告などを援用しつつ、スイスを中心に現在残されているペスタロッチー関連の遺跡保存の現状をまとめる。彼の伝記などを参考に、できる限り詳細に遺跡をチェックした。

② 同時に、前述したように、ペスタロッチーの思想と生活の一体性という特徴を考慮して、その遺跡に彼の教育思想、哲学成立の舞台としての、意味づけを簡潔に行う。

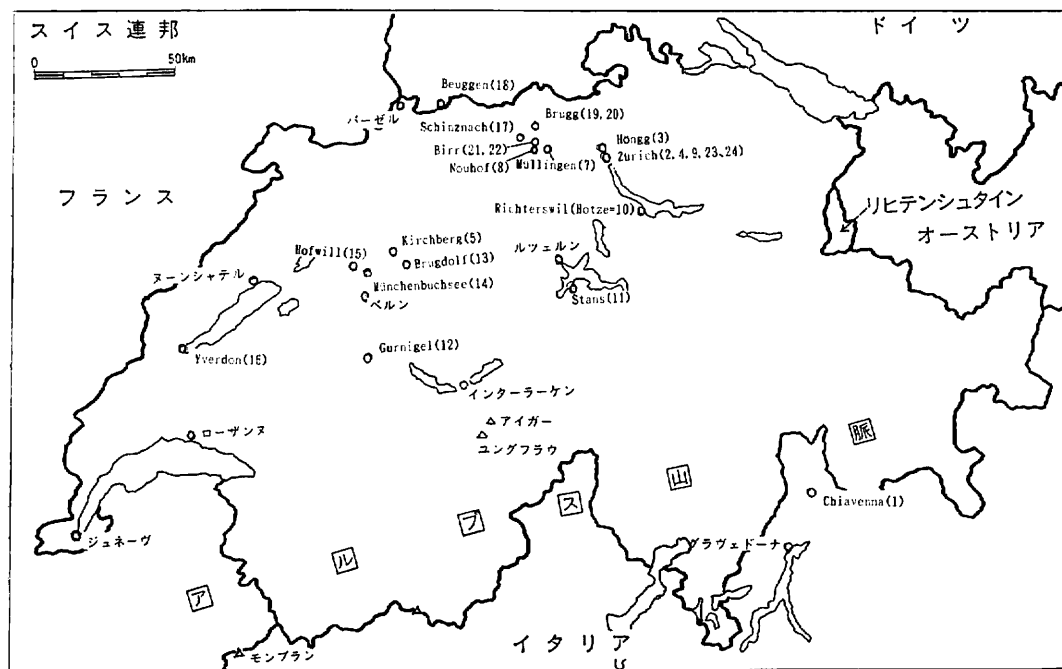
③ 今回の調査報告は勿論、現在(1992年9月)判明している分である。また、紙幅の都合上、一つの遺跡に多くの記述をするにはあまりにも制限があるので、あくまで、その全体像を素描するという段階であること。また、ペスタロッチーの弟子やいわゆる“ペスタロッチー主義”としてスイスを中心に広まっていた教育運動の遺跡、いわばペスタロッチーにとっては第2次的な意味合いの遺跡に関しては、原則として扱わないこととして、次回への課題としておく。

④ 遺跡調査の主要な先行資料・研究ならびに、ペスタロッチーの伝記の理論的典拠としては、次の書物を参考にした。

・ハインリヒ・モルフ、長田訳『ペスタロッチー伝』・福島政雄『ペスタロッチ』・玖村敏雄『ペスタロッチの生涯』・村井実『ペスタロッチーとその時代』・成瀬政雄『ペスタロッチ』・石橋哲成『ヨーロッパ教育史紀行』

ベスタロッター関連の遺跡地図

(数字-番号が本稿で扱ったもの)



参考文献：村井実「ベスタロッターとその時代」

## 2

以下、原則的には、ベスタロッターの生涯に沿って、その遺跡の現状と並びにその思想成立上の意味を簡潔に考えていく。[1992年のP.S.T.では(1)から(24)までを全て確認したが、建物などその時には、実際に入らなかった箇所もあったので、必要に応じて、先行調査・研究と報告も援用した。また、特に明記していないものは、スイス国内にあるもの] (地図参照)

## 1) キャベンナ (Chiavenna, イタリア)

「人跡まれな谷また谷が続く地域の真っ只中に位置する」(ミシュラン) アルプスの山間の小さな町。ベスタロッター家の先祖の地。北イタリアのコモ湖から続く道が、二つの峠(シュブリュエゲン峠とマローヤ峠)へと別れる分岐点。その駅近くにベスタロッター広場という名の広場(PALAZZO PESTALOZZI sec. XVI)があり、その商店街の一角にベスタロッター家の先祖の家跡あり。ただし、ここでのベスタロッター家は2年前(1990年)に途絶えている。

ベスタロッターの生涯を辿り始めるとき、チューリッヒに残る彼の生家を私たちは従来、その出発点に据えていた。しかし、1992年のP.S.T.では真のベスタロッテ

ー像に近づくという意図より、ベスタロッター家の先祖の土地をまず調べた。13世紀の終わり頃、ベスタロッター家の先祖が、グラヴェドナからキャベンナに移り住んだ。そして、このキャベンナのベスタロッター家から、16世紀にアントニオという青年がアルプスの山を越えて(その際、シュブリュエゲン峠とマローヤ峠のどちらの峠を越えたかは不明)、チューリッヒに商業の勉強に赴き、そこに住みついた。そして、イタリアのロカルノからきた女性と結婚し、家庭を設けたのが、スイスでのベスタロッター家の出発点となっている。

このことは意義深い。村井はこのキャベンナについて、特に以下のような考えを示している。ベスタロッターがスイスという寒冷の地に不釣り合いな炎のような激しさをしばしば見せたのは、この南の国の情熱的なイタリア人の血が彼の中で、はるか遠い記憶として、生きていたのではないか。あるいは、彼がしばしば非常な苦境に立ったとき、自ら「アルプスの谷の子」と称して自分を叱咤したと言われる。だが、この「アルプス」が一体どこを指していたかということ、彼が生まれ育ったチューリッヒ周辺はスイスでも一番の平野であり、およそ「アルプス」という地形とはかけ離れている。すると、彼は、このベスタロッター家先祖の地キャベンナからマローヤ

峠に向かう、切り立ったベルゲルの谷の周辺を指して、「アルプスの谷の子」と称していたのではないか。ただし、ペスタロッター自身がこの地を訪れた記録は今のところない。

## 2) ヒルシェングラーベン (Hirschengraben) 18 番地 (チューリッヒ)

正確には、ペスタロッターの生家ではないが、この家の塀には次のようなプレートがある。「この場所から遠くないヒルシェングラーベンのある家で、民衆の教育者であるハインリッヒ・ペスタロッターは 1746 年 1 月 12 日生まれた」現在はペスタロッターの生まれたと言われる家はなくなっており、その跡には市立美術館が立っている。なお、この美術館の 2 階に、アルベルト・アンゲルによる「ハインリッヒ・ペスタロッターとシュタントツの孤児たち」(1870) の油絵が展示されているそうである。(石橋)

## 3) ヘンク (Höngg) (チューリッヒ)

リマート河の豊かな流れを眼下に立つ教会。プレートには次のように記されている。「1769 年に亡くなった祖父 アンドレアス・ペスタロッター 主席牧師のもとでハインリッヒ・ペスタロッターは、はやくから若者や民衆に対する愛の心を得た」(石橋訳) 祖父のアンドレアスが牧師をしていたところ。幼くして父を失ったペスタロッターは、幼少時代より、この教会をたびたび訪れた。そして、貧しい農民たちや病人たちを訪問する祖父の仕事を見て、(祖父は父の死後 18 年間生存していた) 少年ペスタロッターもいつしか祖父を理想とし、牧師になることを夢見る。ペスタロッターの生涯と思想の方向性の基礎を作った、意味のある場所である。

## 4) ミュンスターガッセ (Munstergasse) 23 番地 (チューリッヒ)

ペスタロッターが青年時代を過ごした家の跡。現在は一階は遊技場のようなものになっている。プレートには「この家にハインリッヒ・ペスタロッターは学生時代の間、1762 年から 1765 年に住んだ」と記されている。ルソーを理論的支柱としていた「愛国者団」という若者のサークルに所属していたペスタロッターは、ここで『エミール』を読んで、大いなる感化を受けた。当時、法律の勉強をし、それによって社会改革を夢見ていたペスタロッターであったが、政府を批判する文書にまつわる事件で嫌疑をかけられ、拘禁される。その事件を契機にして、彼は自分の関心を法律学や神学から、貧しい農民とその教育の問題へと向けていくのである。

## 5) キルヒベルグ (Kirchberg) — チュッフェリー農場の跡

牧師の道をあきらめ、貧しい農民に奉仕することをきめた 22 歳のペスタロッターが、1767 年 9 月から翌年 6 月にかけて、農業家チュッフェリーの農場で実習をしていたところである。現在でも、周囲は田園地帯に囲まれたその建物の壁に次のような言葉が刻み込まれている。「この農場で 1761 年から 1770 年まで、ヨハン・ルードルフ・ティフィリ (1716-1780) は、異例の成功をおさめた。彼はベルン経済協同組合の創立者であり、18 世紀の農業運動の指導者であり、ベルンにおける農業の改革者であった。また、人類の友、実行の人、実行のキリスト者たる故に、後世の人々からいつまでも偲ばれているハインリッヒ・ペスタロッターの指導者でもあった」(石橋訳)

## 6) ゲーベンストルフ (Gebenstorf) の教会

1769 年 9 月 20 日、ペスタロッター (23 歳) とアンナ (30 歳) が結婚式を挙げた教会。この教会の牧師の息子 A・レンガーが内務大臣となり、当時ペスタロッターと親交をもっていた。ただし、1897 年の火災で焼け、現在あるのはその後のもの。教会内部に焼ける以前の古い教会の写真あり。

## 7) ミューリンゲン (Müllingen), Birrfeld 46-B

ペスタロッターとアンナが新婚生活を過ごした場所。現在は Marra 家が住んでいる。

## 8) ノイホーフ (Neuhof)

22 歳の若きペスタロッターが、農業者としてさらには教育者として人生をスタートしたところである。農業では失敗したものの、息子ヤコブリーの育児を通し、子供や人間における自然というものを問い始めるきっかけを作っていた。また、1825 年イヴェルドンから戻ったペスタロッターが晩年の 1 年間に過ごした場所でもある。80 歳のペスタロッターは、ここに戻ってなおも活動力は衰えず、貧民学校を作ろうと、建物の建築を始めさせている。そして、自らも室内の土間に小石を敷き詰め、暖房装置を作る作業を誰の助力も求めず、行ったという。ペスタロッターの教育実践の真随を彷彿させる場所である。

豊かな田園地帯に囲まれたこの建物の一群は、「スイス・ペスタロッターの家」と呼ばれ、「ベヒターハウス」の名称で青少年のために職業訓練などをするための学校となっている。施設の方の説明によると、一日一人あたり日本の金額にして 32000 円という大変な費用をかけているそうである。1771 年に立てられた建物 (PACHTERHAUS) と晩年の 1825 年に立てられた建物 (HER-

RENHAUS)が修復されて残っている。また、有名なグローブ作『シュタンツの孤児たち』(1879)の絵、ならびに息子のヤコブリーが誕生した時(1770)に、記念して植えた菩提樹の木が残っている。

#### 9) プラッテンシュトラッセ (Platten Strasse) 16 番地 (チューリッヒ)

1796年、28年間のノイホーフの生活を終え、シュタンツに移るまで、しばらくのあいだここに住んでいた。料理店があると先人の報告を聞いていたので、P.S.T.訪問時には、かなり探索したものの、残念ながら、ここには現在、チューリッヒ大学の施設の一部が新設されており、それを示すプレートなどを見つけることはできなかった。

#### 10) ホッツェ家 (Hotze) (リヒターズビル)

ポストシュトラッセ通り 16番地に、ベスタロッターの母スザンヌ・ホッツェ (1720-96)の生家がある。ベスタロッターは医師であった伯父のホッツェをしばしば訪問した。彼が43歳の1793年、フィヒテ (1762-1814)がここを訪れて、数日間二人で熱心に語り合った。その結果、ベスタロッターは、自分の考えてきたことが、当時のカント哲学の思想潮流と一致することに満足を得て、『探求』(1797)の原稿を完成させるに至ったと言われる。また、フィヒテの方も『ドイツ国民に告ぐ』(1807-08)という講演で、ベスタロッターの思想と方法をドイツの国民教育の核心にすることを提唱することになる。プレートあり「ヨハネス・ホッツェ博士 (1734-1801)、コンラート・ホッツェ将軍 (1739-1799)、ハインリッヒ・ベスタロッター 1793年-1794年の冬、この家の馴染み客たち; LAVATER GOETHE CHARLOTTE V. LENGEFELD HERZOG KARL AUGUST V. WEIMAR FICHTER」

#### 11) シュタンツ (Stans)—孤児院跡

プレートには次のように記されている。「ここにハインリッヒ・ベスタロッターは、ニードバルデンの孤児たちへの献身のなかで、教育の新しい道をみいだした。」(石橋訳) 1798年にフランス軍によって破壊され、その孤児たちの救済のために、53歳のベスタロッターが自ら乗り込んでいった場所である。実践家としての道を本格的に歩み始めた場所である。またその経験から、基礎陶冶の理念、つまり、頭と心と手の働きによる陶冶が、生活経験の中で、次第に高い段階へと発展していくという思想に、彼は開眼していく。

現在は、この建物は中学校と実科学校とをもつ「シュタンツ聖クララ女子学園」として使われている。また、

二階には、「聖ケシリア」と名づけられた部屋がある。これは、当時の孤児たちの寝室であり、ベスタロッターが子供達の真ん中で寝たという、その部屋である。

#### 12) グルニーゲル (Gurnigel)

寝食を忘れてシュタンツで、孤児たちの世話をしていたベスタロッターであったが、政治的な事情からせつかくの孤児院は半年で解散させられた。1799年、疲労困憊したベスタロッターは、周囲の心配した友人たちによって、アルプス山中のグルニーゲルの温泉に送られ、そこでしばらく静養を強いられた。この地で、心身ともに、健康を回復していったベスタロッターは、シュタンツでの自分のなしたことをはっきりと見定めることができるようになり、『シュタンツ便り』となった友人への手紙を書くことになる。今でも、ここは地元の人の保養地になっているが、残念ながら当時の建物は焼け、その後2度ほど建て直されたそうである。

#### 13) ブルクドルフ (Brugdorf)

##### ① 公立小作人学校跡

1799年7月、靴屋のディズリーの経営する小学校にベスタロッターは就職し、初めて公立学校の教壇にたった場所である。3階建ての建物の壁にプレートあり。「1799年、この家でベスタロッターは初めて公立小学校の教育を行う。私は私の老いたる日に、下から上へと奉仕したことを、生涯の王冠と思う。」

##### ② ブルクドルフ城跡

城の第1の門をくぐり、第2の門の手前の右の木陰に、ベスタロッターのプレートがある。「1799-1804年ハインリッヒ・ベスタロッターに感謝の心をもってささぐ。ブルクドルフの町より。1888年。内なる神の声はささやく自分のために生きるな。兄弟たちのために生きなさい。ゲルトルートは如何にその子を教えたか。1801年」(最近、このプレートの位置が少し動かされた)城の内部は3層にわたって博物館が設置されており、ベスタロッターの思い出の品々もある。

協力者にもめぐまれた彼の学校は繁栄し、ブルクドルフは当時のヨーロッパ教育のメッカとなった。また、ベスタロッターも教育方法上の原理をまとめることができ、『ゲルトルートは如何にその子を教育したか』『メトード』などをこの時期に発表している。アメリカに初めてベスタロッター主義による学校を開いたアルザス出身のヨゼフ・ニーフもここで、ベスタロッターの助手となっている。さらに、若きヘルパルトもここを訪れ、ベスタロッターは大いに感激して、実際に授業を見せ、彼に大きな影響を与えた場所でもある。

#### 14) ミュンブーフゼー (Münchenbuchsee)

1804年、ペスタロッチーがブルクドルフを去り、イヴェルドンへ移る前に、半年足らず教育を行った場所である。閑静な住宅街に残された建物は、1890年以降、ろうあ学校として使われ、現在もベルン県の「言語治療学校」として使用されている。

#### 15) ホーフヴィル (Hofwil)

ミュンブーフゼーより徒歩 10 分程の所。ペスタロッチーの親しい隣人であったフェレンベルグが、経営していた学校であり、ゲーテの『ウィルヘルム・マイスター』の「教育の村」のモデルと言われる場所である。ペスタロッチーのブルクドルフの学校が瓦解したとき、このフェレンベルグの学校との合併案が持ち上がり、ペスタロッチーもこれに同意し、彼の学校は一時、フェレンベルグの管理下におかれた。しかし、たとえ、教育熱心な二人であっても、フェレンベルグのいわば貴族的な理想主義と、ペスタロッチーの民衆への愛情に満ちた人間主義とは合いいれぬものがあり、まもなく、ペスタロッチーはイヴェルドンの学校へ移ることになる。かつての場所には現在は、教員養成所があり、その前にはペスタロッチーの記念像のある噴水がある。(P.S.T. の訪問時には建物は修復中であった)。

#### 16) イヴェルドン (Yverdon)

ジュラ山脈の麓、スーンシャテル湖に面したイヴェルドンでは、ペスタロッチーの教育実践が 1805 年から 1825 年にかけて、華々しく展開された。

フランス語圏であるここにペスタロッチーたちが移って来たとき、当初は長くいる計画は必ずしもなかったらしい。しかし、新しくスイス連邦に加盟したヴォー州が新鮮な情熱をもって国作りを踏み出しており、イヴェルドン市当局の暖かい援助により、国より買い受けた古城に修理を加えて、これをペスタロッチーに無償で提供した。そして、学校は繁榮し、1、2 年のうちにここに関係する人間だけで、250 名にもなり、国別でもヨーロッパ全土、さらにはアメリカに及んだ。ペスタロッチーとその協力者たちが、ほとんどドイツ語圏出身の人間であったにもかかわらず、彼らの活動が、フランス語圏の土地で最大の支援を受けたということは、やや不思議な感じもするが、それはむしろ、ペスタロッチー教育の普遍性を示す証しに他ならないだろう。

しかし、このイヴェルドンはまた別の意味で、実験の地であったのではないかと筆者は考える。つまり、ペスタロッチーの思想や理念が次第に弟子たちに受け継がれていき、そして、彼らが熱心であればあるほど、その

理念が硬直化して、自己流のペスタロッチー像が出来上がっていった。そして、ニーデラーとシュミットの二人の弟子たちが衝突したように、人間関係の衝突とか軋轢が次第に発生していったのである。一つの優れた思想が弟子たちに受け継がれ、あるいは実践に移されていき、発展するにつれて、その当初の理念の純粋性を守り続けることの難しさを、教えてくれる場所ではなからうか。

現在、市内には、次のような遺跡などがある。

#### ① 城

当時の学校である。主に中・上流階級の子供達が寄宿と通学で勉強していたが、相当数の貧児もいた。ここは現在、博物館になっており、ペスタロッチーが実際に使っていた机や椅子、直筆の手紙、聖書などゆかりの品々が展示されている。この城の前の広場には、二人の子供達と語るペスタロッチーの像がある。「私は、乞食たちに人間として生きることを教えるために、私自身一人の乞食として生きた」と台座の部分に、フランス語で記されている。

#### ② 貧民学校

隆盛をきわめた城の学校であったが、そこで学べるのは、一般的には、比較的裕福な家庭の子弟であった。しかし、ペスタロッチーは貧民の子供の教育を忘れることができず、1818年に城の近くの、クランディー通り 27 番地に貧民学校を創立している。しかし、実際はさまざまな困難な事情のために、1 年ほどで閉鎖され、城の学校に合併されている。建物の入り口にプレートあり。「1818年に、アンリ・ペスタロッチー (フランス語表記) は、この家の中に、貧民の学校を設けた。」現在私邸であるこの建物の 2 階には、ペスタロッチーの肖像画があった。

#### ③ 女学校

城の前の広場に面した (RUE du FOUR) という通りにある建物。1806年に、設けられた女子生徒の学校は、当初はクリュージーが世話していたが、のちにニーデラー夫人となるロゼッテ・カストホーファーがペスタロッチーに委任され、1808年以降、学校を引き受けていた。現在は、市庁舎として使用されている。

#### ④ 聾啞学校

城に続く (Rue de la Plaine) に面した建物。ペスタロッチーの助手のヨハン・コンラート・ネーフが聾啞者のための学校をここで管理していた。

#### ⑤ アンナ夫人の墓

城の近くの共同墓地にある。1815年 12月 11日になくなった。77歳。当初は、彼女が生前に好んで座ってい

た二本のくるみの木の下が、アンナ夫人の永遠の憩いの場所とされたが、1866年8月に、市当局によって、町の共同墓地に移されている。墓には、彼女の顔のレリーフがあり、その下には次のように書かれている。「アンナ・ベスタロッチー シュルテス家に生まれたアンナ・ベスタロッチー 1740年8月11日に生まれ、1815年12月11日に没す。貧民の友、民衆の恩人、教育の改革者たるベスタロッチーにふさわしき妻。彼の献身的な活動の46年の間、惜しみなく協力した彼女は、その死後、祝福され、尊敬される名声を残した。

#### ⑥ ベスタロッチー文献研究センター (Centre de documentation et de recherche Pestalozzi)

1992年9月のP.S.T.訪問時に、私の下手なフランス語にも辛抱してくれ、私たちを案内してくれた Waridel 女史のオフィス。城の前の広場に面した建物の2階にあり、現在、ベスタロッチー関係の資料、文献の収集や講演の開催、あるいは訪問客の案内をしたりして、ベスタロッチー教育学の普及に努めている。

#### 17) シンツナッハ (Schinznach)

1826年5月、ベスタロッチーが生涯の終わりに会長に推挙された「ヘルヴェチア協会」の本拠のあった所。現在は温泉プールなどのある閑静な保養地となっている。片隅に現在は使われていない古い教会があったが、これがベスタロッチーにゆかりの建物であるかは不明。

#### 18) ボイゲン (Beuggen, ドイツ)

生涯最期の夏、パーゼルを訪れたベスタロッチーは、シュミットと共に、1827年7月21日、彼の方法に従って、孤児達を教育しているクリスチャン・ハインリッヒ・ツェラー (Christian Heinrich Zeller, 1779-1860) の学校を訪問している、とこの学校の当時の記録簿に残されているそうである。C. H. ツェラーは、ベスタロッチーの弟子であったカール・オギュースト・ツェラー (1774-1840) の弟である。教師職を志して、ツェラーはアウクスブルグの貴族の家庭教師となり、やがてザンクト・ガレンの学校で6年間教えた後、ゾーフンゲンの学校視察になる。その後、パーゼルの伝導協会の依頼で、1820年から40年間、ボイゲンの城で孤児院と、貧民学校の教師養成所の施設を運営した。ベスタロッチーの訪問時には、100人の生徒達が『リーハルトとゲルトルート』の中に引用されているゲーテの詩「旅人の夜の歌」を歌って歓迎した。続いて彼に樅の葉の冠が捧げられたとき、ベスタロッチーはそれを受けようとはせず、一人の子供の頭の上において、「(この名譽は)私ではなく、純真な人こそふさわしい」と言ったといわれる。

この城と学校の跡はライン川のほとり、ボイゲン駅のすぐ近く、徒歩2分の地に現在も残っている。

#### 19) ローテスハウス (ROTES HAUS)

ブルック (Brugg) の町の広場にある赤い建物。1827年2月15日、ベスタロッチーがこの世の最期の数日間を過ごすために運び込まれて、訪れた何人かの友人たちと親しく別れの言葉を交わしたという、由緒あるホテルである。現在でも1階は地元の人々が集うレストランであり、2階は宿泊部屋となっている。

#### 20) 最期の家 (Hauptstraße 39)

ローテスハウスから約100メートルほど離れた中央通り39番地にベスタロッチーの終焉の家がある。現在は、子供の可愛い置物などを売る小さなこの店の2階で亡くなったと言われている。通りに面して、ベスタロッチーの横顔のレリーフと、「ヨハン・ハインリッヒ・ベスタロッチーは、1827年2月17日、この家で亡くなった」という言葉を掘り込んだ石板が建物の壁にはめ込まれている。

#### 21) ビル (Birr)―墓

1827年、ベスタロッチーの葬儀がこの村の教会で行われた。向かって左側に小さな小学校の建物がある。晩年のベスタロッチーがこの小学校の子供達と遊ぶことを好んだといわれる。その建物の教会に面した壁面が、すべてベスタロッチーの墓という形式になっている。

碑文は彼の一生を簡潔に叙述している。「ここにハインリッヒ・ベスタロッチー 休らう 1746年1月12日チューリッヒに生まれ 1827年2月17日ブルックで逝く ノイホーフでは貧者を救い『リーハルトとゲルトルート』では民衆に教え シュタンツでは孤児の父 ブルグドルフとミュヘンブーフゼーでは新しい小学校の基礎を作り イヴェルドンでは人類の教育者になった 人間キリスト教 市民 すべてを他者のために 己には何ものをも その人の名に恵みあれ」(村井訳)

#### 22) 長田新の墓 (Birr)

ベスタロッチーの墓に向かい合った形で教会があり、その教会の壁面に、日本の著名なベスタロッチー研究者であり、同時にその研究上の情熱をもって、ベスタロッチーの思想と精神とを日本に再生させることに注いだ長田新の墓がある。碑文は次の通り。「ここにその最後の願いに充ちてベスタロッチーの偉大な賛仰者、長田新 1887-1961 の遺骨が鎮まる 広島大学教育学部教授チューリッヒ大学名誉博士 日本での広汎なベスタロッチー運動の創始者 ベスタロッチーの著作の日本語への翻訳者及び編集者としての倦むことなき活動に感謝をもって



スイス民主主義の友たり敬愛者たりし人に捧げる」  
(村井訳)

### 23) ペスタロッチー記念館 (チューリッヒ)

中央駅西方 700 M ほどに山の手、ペッケンホーフと呼ばれる場所にペスタロッチー記念館 (Pestalozzianum) がある。建物の中には、ペスタロッチーの肖像画、遺言状、彼が幼いころ使っていたというベッド、彼の遺髪、デスマスク、アンナも弾いていたというパイプオルガンをはじめ、彼に関連する品々が展示されている。

### 24) ペスタロッチー公園 (Pestalozzianlage)

中央駅からまっすぐパンホーフ通りを 200 M ほどいった右手にある。この広場は、人々の憩いの場所となっている。広場の後方中央に、子供の手をやさしくとって、一緒に歩いているかのようなペスタロッチーの像がある。

・未確認 [ペスタロッチーの伝記などにはその地名が記されているが、現在のところ未確認 (前述の参考文献にも調査した跡のない) の場所]

### 25) コソナイ (Cossonay)

1804 年に、ミュンブーフゼーから分離して、2, 3 週間クリュージーと一緒にペスタロッチーが、住んでいた場所。ここで馬車にひかれるが、彼自身に被害はなく、彼にそれが新しい生命力を与えた。

### 26) ビュール (Bulet)

1817 年 7 月、イヴェルドンでの問題が心労となり、病氣となったペスタロッチーは、ジュラ山脈のビュールに静養に送られている。

## 3

以上のようにまとめてみたが、一つ一つの遺跡について、紙幅の関係から思ったような記述ができなかったことは付け加えておかねばならない。そうした制限はあったものの、今回こうした形でペスタロッチーの遺跡を整理、素描していく中で、次の問題を改めて考えさせられた。

第 1 の点は、イヴェルドンの所で、コメントしたことに関連する。ペスタロッチーがこのように活動の場を転々としたことは、勿論偶然の所産であったかもしれない。しかし、彼の真意からすればむしろ必然的なことではなかったか。つまり、その教育の場の度々の移動とは、彼にとって、常により善い教育を模索していく上でのまさに、遍歴であり、過程にほかならなかつたからである。それゆえに、あれほど繁栄したイヴェルドンを去った彼は、ノイホーフに戻り、80 歳にして新たなス

タートを切ろうとし、再度教育活動を始めたのである。この道程とは彼の教育思想と同様である。つまり、子供の中にある善さを伸ばすその過程こそが、教育であると考えていたように、彼自身も自分のなした業績 (結果) に満足せず、常により善い教育実践を模索する (過程) を重視したことにほかならない。その意味で、その後、ペスタロッチーの名の下で、世界各地で行われたさまざまな教育実践が (例えば、R・オーエンが主宰したニュー・ハーモニーの実験など)、ペスタロッチーのこの教育に対する基本的態度を本当に理解していたかどうかは、検討と疑問の余地がある。教育学の上では興味深いテーマでもあり、今後の課題としておく。

第 2 に、なぜ、岩と氷と雪しかなかった貧しい農業国スイスが、今日の繁栄を築くようになったのか。このことを改めて考えてみるに、成瀬政雄が「巡礼」の旅の途中で感じたように、ペスタロッチーの存在が大きかったのではないか。ペスタロッチーが身をもって実践してきた教育の考え方、つまり、「善さ」への意欲、能力、知力を啓発し、精神的にも物質的にも真に自立する人間を育成する。この教育立国の精神がスイス人の抱えていた逆境を見事に逆転させたといえる。それゆえ、ペスタロッチーは今でもスイス人の誇りであり、心のより所のような存在なのである。成瀬政雄はかつて、チップェリー農場の跡で老婦人に聞いた言葉を次のようにまとめている。「山が高い。地上にも地下にも資源がない。国民は四つの国語をそれぞれに話し合っている。共同はむづかしい。これらが今になってみますと、スイスのいいところに変わっています。山が高いから雪と氷がある。これが発電のダムになる。電力がありあまる。地上にも地下にも資源がない。だから実学を盛んにする。工業教育を重視する。職業教育、職業訓練を励む。すると、立派な工業が成りたつ。……4 つの国語は四つの文化をスイスに運び入れてくれます。ですからスイスの機械を見て下さい。この耐久力はドイツの文化です。この創意はフランスの文化です。この美しさはイタリア文化です。無理じいされてもへこまないという心はロマニッシュ文化です」(『ペスタロッチーその業績・遺跡・巡礼』)

第 3 に今後の課題を簡潔に述べる。まず、この小論を契機にして、P;S;T. の参加者を中心に、次代に伝えていくようなペスタロッチーの書物が作られることである。とりわけ、このように地球規模でさまざまな問題を抱える現代、ペスタロッチーは常に我々に知恵を授けてくれる存在として、決して我々の脳裏から忘れさせてはならない。次には筆者の個人的関心としては、今回取り

上げたペスタロッチーに直接関連する遺跡がある程度整理できたら、スイスを中心に世界的に広まっていったペスタロッチー主義と呼ばれる教育実践の跡を調査することである。それによって、また、新たなペスタロッチー理解に、光を投じることができるかもしれないと考えている。

### 主要参考文献

- ① ペスタロッチー原典
- ・長田新編集校閲『ペスタロッチー全集』(全13巻) 平凡社 1959年。
  - ・ペスタロッチー著 福島政雄訳『ペスタロッチー全集』(全5巻) 玉川大学出版部 1949年。
  - ・ペスタロッチー著 梅根 悟訳『政治と教育』 明治図書 1965年。
- ② 解説書・伝記類
- ・ハインリヒ・モルフ著 長田 新訳『ペスタロッチー傳』(全5巻) 岩波書店 1939年。
  - ・長田 新著『ペスタロッチー教育学』 岩波書店 1939年。
  - ・福島政雄著『ペスタロッチ』 福村出版 1964年。
  - ・玖村敏雄著『ペスタロッチの生涯』 玉川大学出版部 1960年。
  - ・村井 実著『ペスタロッチーとその時代』 玉川大学出版部 1986年。
  - ・村井 実著『いま、ペスタロッチーを読む』 玉川大学出版部 1990年。
  - ・石橋哲成著『ヨーロッパ教育史紀行』 玉川大学出版部 1983年。
- ③
- ・成瀬政雄著『ペスタロッチーその業績・遺跡・巡礼』 雇用問題研究会 1979年。
  - ・Hanz Katz『Der Herz an der Angel—150 Jahre Kinderheim Beuggen』 MCMLXX。
  - ・『NEUIIOP—Stiftung Schweizerisches Pestalozziheim Birr』 1989。
  - ・『Pestalozzianum』 23. Februar 1977 73. Jahrgang Nummer 1。
  - ・『Henri Pestalozzi 1746—1827』 CORNAZ S. A. YVERDON。
  - ・『Bulletin d'information No 4』 Centre de documentation et de recherche Pestalozzi. Yverdon。
  - ・『P. S. T. 村井 実先生 レクチャー①』 1992年9月8日 於: GRAND HOTEL TREMEZZO PALACE。
  - ・『教皇 J. H. ペスタロッチーと、かれが愛したスイスの山と湖を訪ねる旅』 渡辺 弘著 1992年。
  - ・『Pestalozzi Study Tour』 第14回人間主義学会配布資料 1992年12月。
  - ・渡辺 弘氏のペスタロッチー遺跡調査メモ。
  - ・渡辺 弘氏作成の P. S. T. のビデオ(全2時間) 1992年9月。
  - ・『ミシュラン・グリーンガイド』 スイス、イタリア編 1991年 実業之日本社
  - ・『Dictionnaire de Pédagogie et d'instruction primaire』 F. Buisson Paris 1887。